

① 名古屋市における哺乳類の概況

既存の名古屋市における哺乳類の生息分布情報については、主に「レッドデータブックなごや 2004」(名古屋市, 2004)、「レッドデータブックなごや 2010 (2004 年版補遺)」(名古屋市, 2010)、「レッドデータブックなごや 2015」(名古屋市, 2015)、「新修名古屋市史資料編自然目録」(名古屋市, 2008)を参考とした。その他、「なごやため池生物多様性保全協議会 (2009~2011)」、「なごや生物多様性保全活動協議会 (2011~)」が実施した哺乳類調査と名古屋市各区の環境事業所から寄せられたへい死個体の回収記録、なごや生物多様性センターに寄せられた情報や新聞記事などを参考資料とした。これらについては、基本的に、確認場所や日時、写真、標本が残っているなど、信頼に足ると判断された情報を用いた。

新たな現地調査は 2015~2020 年にかけて実施した。陸生の哺乳類については、フィールドサインの確認、センサーカメラによる自動撮影、各種トラップによる捕獲調査を行った。また、飛翔するコウモリ類については、エコーロケーションコールの録音とその解析による種同定を試みた。

以下の哺乳類については、名古屋市に生息分布する哺乳類から除外した。

- ・海生哺乳類では、本来の生息域から離れ、死んだ状態で漂流していた種 (マッコウクジラ)、または、迷入したと推測される種 (シャチ、イシイルカ)。
- ・家畜化された品種 (イエイヌ、イエネコ、フェレット、カイウサギ)。
- ・野外で見つかっているが、繁殖・定着が確認されていない外来種 (アムールハリネズミ)。

これらを検討した結果、これまでに名古屋市内で確認された哺乳類は、在来種、外来種、絶滅種を含め、8 目 19 科 31 種であった。以下、名古屋市に生息する哺乳類相の特徴を地域ごとに述べる。

東部地域 (山地および丘陵地)

東部地域には樹林地が広く分布しており、その多くは現在、公園緑地や風致地区として残されている。東部地域の最北東部にある東谷山は市内最高峰 (198.3m) の山地で、ニホンリスやムササビ、ニホンテン、ニホンカモシカといった森林性の強い種の主要な生息場所となっている。現在まで、周辺山地との連続性が保たれているため、近隣からの個体の流入があると推測され、ニホンザルの「離れザル」やニホンカモシカの他、市内ではすでに絶滅したと考えられていたイノシシやニホンジカも最近になって確認されている。ニホンカモシカやイノシシについては子連れの個体も確認されており、すでに東谷山地域で繁殖・定着している。その他、ニホンイタチについては、最近の調査で 1 個体のみが東谷山山麓の農地で確認された。外来種であり競争種でもあるシベリアイタチが市内全域に分布を広げた現在、ニホンイタチが市内で生き残っている場所は東谷山地域である可能性が高い。ニホンノウサギについても最近の記録は東谷山と周辺地域のみである。これまで市内での記録がほとんどないニホンテンは、東谷山の瀬戸市側でその生存が確認されている。

東谷山山麓のため池周辺では、エコーロケーションコールの音声解析により、キクガシラコウモリ、オヒキコウモリが確認された。また、この解析によって、上記の種とは明らかに異なるコウモリ類の生息も示唆された。同様の音声は東谷山北側の庄内川沿いでも確認されている。東谷山から北東へ 6km ほど離れた場所には、キクガシラコウモリを含めて数種類のコウモリ類がねぐらとして利用する「愛岐トンネル群 (岐阜県多治見市)」が存在する。飛翔可能なコウモリ類の場合、市外にあるねぐらから市内へと採餌に訪れている可能性も十分に考えられる。

このように、東谷山地域は現在も周辺山地との連続性を保っており、市内の他の地域ではほとんど見られない種の生息地となっている。東谷山地域は、市内における哺乳類のホットスポットであ

りコアエリアとして非常に重要な位置を占めているといえるだろう。一方で、アライグマ、ハクビシン、シベリアイタチといった外来種や愛知県内では有害鳥獣とされるイノシシ、ニホンジカがすでに東谷山地域に生息しており、今後、生態系への影響や他の地域への広がりも含めて注視が必要である。

東部地域には、東谷山以外にも小幡緑地、明德公園、平和公園、東山公園、牧野ヶ池緑地、猪高緑地、相生山緑地、大高緑地といった規模の大きい緑地が多数点在する。かつては繋がりが保たれていたこれらの緑地も、現在では周辺を市街地が囲み、孤立化が著しい。そのため、東谷山地域に比較して、森林性の強い種や生息に広い面積を必要とする大型種の存続は難しいと考えられる。ただし、小型で移動能力が低いモグラ類、ネズミ類や市街地にも進出したタヌキにとっては、これらの孤立した緑地が現在の主要な生息場所となっている。また最近では、市内で分布を広げているアカギツネもこれらの緑地内で確認されるようになった。アカギツネは庄内川や天白川沿いを回廊として利用し、各緑地に分散しているものと考えられる。

名古屋市有数の湧水地である才井戸流では、周辺に広がるヨシ原でカヤネズミの球巣が多数確認された。また、2018年には、すでに市内での確認が難しいニホンジネズミやキクガシラコウモリのねぐらも確認されている。この地域には、隣接して大型店舗が立地予定であるため、今後、生息地への影響が懸念される。

その他、市東部の南側、豊明市との市境付近では、樹林に囲まれた個人の農地で、市内では31年ぶりとなるアナグマの生息が確認された。この農地は愛知用水沿いにある風致地区で、比較的里山の景観が残されている地域ではあるが、すでに周辺まで宅地が迫っており、今後の存続が危ぶまれる。

外来のアライグマやハクビシン、シベリアイタチについては、すでに市東部の孤立した緑地でも確認されている。これらの外来哺乳類は、緑地内に生き残る様々な在来生物に影響を与えていると推測される。特にアライグマについては、両生類やニホンイシガメといった水辺の生物に対する食害が懸念される。また、これらの外来哺乳類は周辺の市街地にも進出し、家屋への侵入や糞尿による被害等を引き起こしている。その他、東部地域のため池や河川では外来種のヌートリアが繁殖・定着している。

中央部地域（洪積台地）

都市域の中央部地域で規模の大きい緑地が残っているのは、熱田神宮および名古屋城である。この内、熱田神宮にはタヌキと外来種のハクビシンが生息する。名古屋城とその周辺にはコウベモグラとタヌキ、外来種のヌートリアとハクビシンが生息する。特に名古屋城の外堀は、日常的な人の侵入がほとんどないため、タヌキやコウベモグラの好適な生息場所となっている。名古屋城の水堀にはヌートリアが生息し、岸辺にトンネル状の巣を作っている。この水堀では、希少な水生植物のオニバスが20年ぶりに確認されたが、オニバスが生育している場所のすぐ近くにヌートリアが営巣しているため、オニバスへの食害が懸念される。ヌートリアについては市の中心部を流れる堀川でも生息が確認されている。

中央部地域は都市域であるにもかかわらず、希少な2種類のコウモリ類（オヒキコウモリ、ヒナコウモリ）が確認されている。いずれも、都市域のビル街で拾得されたものだが、オヒキコウモリは最近、名古屋城とその周辺で活動していることが明らかとなった。名古屋城の石垣をねぐらとして利用している可能性もあるが、現在までねぐらは確認されていない。オヒキコウモリは長距離飛

行も可能であることから、採餌のために市外から飛翔してくる可能性も残されている。ヒナコウモリは他地域においても都市域での確認数が増加している。今回、確認されたヒナコウモリは、拾得時期が冬期であったことから、ビル等の隙間で越冬していた個体であると推測される。

外来種については都市部を含む中央部地域においても、ヌートリアの他にアライグマ、ハクビシン、シベリアイタチが確認されている。これら 3 種の外来種は、周辺に緑地がほとんど見られない市街地にも進出しており、家屋や軒下、排管内といった人工物をねぐらとし、放置ゴミやペットの餌など人為的なものも含めて様々な食物を採食しているものと推測される。東部地域と同様、家屋への侵入や糞尿による被害が見られる。

西部地域（沖積平野）

西部地域は樹林地が少ないため、森林に強く依存した種を欠くが、その代わりに農地や河川敷の緑地が広がり、その一帯が哺乳類の生息場所となっている。庄内川下流域の河川敷に広がる土壌堆積地にはコウベモグラが生息し、高茎草地にはカヤネズミやアカネズミが生息する。河川敷に残されたこのような自然環境は、近年、河川の改修工事等によって、消失、分断され、縮小・孤立化する傾向にあるが、タヌキなどの中型哺乳類は頻繁に利用しており、最近ではアカギツネの進出も確認されている。アカギツネは庄内川沿いを回廊として移動し、河口から 2km 程度の場所でも確認されていることから、すでにこの地域に定着しているものと考えられる。

その他、西部地域でも、外来種のヌートリア、ハクビシン、シベリアイタチ、アライグマが確認されている。特に水田の多い西部地域では、ヌートリアによる稲の食害がみられる。

名古屋港（沿岸海域）

名古屋港では海生哺乳類であるスナメリが確認されている。名古屋港は大型の船舶が行き来する日本の主要な貿易港の一つであり、都市河川が流入する地域である。沿岸性が強い本種にとって、人間活動の与える影響が懸念されるが、これまで湾内でのスナメリの詳細な情報はなかった。2011 年より名古屋港水族館による湾内でのスナメリ調査がはじまり、その実態が明らかにされつつある。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

名古屋市版レッドリスト 2020 には、7 目 13 科 20 種を掲載した。掲載種の内、絶滅 (EX) 1 種、絶滅危惧 I A 類 (CR) 11 種、絶滅危惧 I B 類 (EN) 4 種、絶滅危惧 II 類 (VU) 2 種、準絶滅危惧 (NT) 1 種、情報不足 (DD) 1 種であった。

以下、名古屋市版レッドリスト 2015 と比較してランクの変更があった種について述べる。

名古屋市版レッドリスト 2015（以下、レッドリスト 2015）では、情報不足 (DD) として掲載したイノシシとニホンザルおよび絶滅 (EX) として掲載したものの、2017 年になって東谷山地域で再発見されたニホンジカは、愛知県内において増加傾向にあり、市内でも今後、獣害を引き起こすことが懸念される。そのため、今回の改定ではランク外とした。

レッドリスト 2015 で絶滅危惧 I A 類 (CR) として掲載したアカギツネは、大高緑地など新たな確認地域が見つかることに加え、庄内川の下流域でも確認されるなど、市内での分布を拡大していると考えられるため、ランクを下げ、絶滅危惧 I B 類 (EN) とした。

オヒキコウモリについては、2011 年 10 月に中区丸の内ですべて衰弱した個体が 1 個体のみ確認され、レッドリスト 2015 では情報不足 (DD) として掲載したが、その後、エコーロケーションコールの

音声解析により、名古屋城敷地内で頻繁に活動していることが明らかとなった。ただし、名古屋城とその周辺以外では、定常的に活動している地域が確認できないことから、レッドリスト 2020 では絶滅危惧 I A 類 (CR) として掲載した。

レッドリスト 2015 では準絶滅危惧 (NT) としたニホンカモシカは、東谷山とその周辺でのみ確認されているが、市内での生息適地が狭いことやニホンジカやイノシシの増加による影響が懸念されるため、ランクを上げ、絶滅危惧 II 類 (VU) に変更した。

今回、レッドリスト 2020 に追加したヒナコウモリは、2016 年 1 月に都市域である中区栄三丁目のビル街ではじめて確認された。これまでヒナコウモリは、エコーロケーションコールの音声解析によって、市内緑地での生息が示唆されていた。その後、2019 年 1 月には、東山動植物園敷地内でも 1 個体が拾得されている。ただし、ヒナコウモリの音声による確実な同定は困難であるため、市内全域での生息状況については未だ不明である。そのため、今回は情報不足 (DD) として掲載した。

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各哺乳類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【 掲載種の解説（哺乳類）に関する凡例 】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目、科、種の配列は原則として「世界哺乳類標準和名目録」（日本哺乳類学会分類群名・標本検討委員会、2018）に準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「世界哺乳類標準和名目録」（日本哺乳類学会分類群名・標本検討委員会、2018）に準拠した。

【評価区分】

対象種の名古屋市における評価区分を各頁右上の枠内に記述した。参考として「「レッドリストあいち 2020」「レッドデータブックあいち 2020」（愛知県、2020）の愛知県での評価区分、及び「環境省レッドリスト 2020」（環境省、2020）の全国での評価区分も併記した。


【評価理由】

対象種を名古屋市版レッドデータブック掲載種として評価した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述し、一部の種については写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査及び文献調査によって確認された地域について、各区ごとに着色して市内分布図として掲載した。ただし、絶滅と判断された区域は  で示した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項について補足説明した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

ヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* (Peters)

評価区分

名古屋市2020	情報不足
愛知県2020	絶滅危惧IB類
環境省2020	リスト外

【評価理由】

市内では中区栄三丁目のビル街ではじめて確認された。現在までに、市内でのねぐらの情報は無い。

【形態】

黒褐色の体毛に先端の白い毛が混ざるため、霜降り状に見える。前腕長 47~54mm。頭胴長 78~80mm。尾長 35~50mm、体重 14~30g。

【分布の概要】

【市内の分布】

中区栄三丁目（野呂，2017）と千種区の東山動植物園敷地内で確認されている。

【県内の分布】

北設楽郡設楽町東納庫大桑（川田，2004）。安城市日の出町（小鹿・子安，2007）。北設楽郡豊根村富山（佐藤ほか，2008）で確認されている。

【国内の分布】

北海道、青森県、岩手県、山形県、福島県、栃木県、東京都、新潟県、福井県、長野県、岐阜県、愛知県、大阪府、和歌山県、岡山県、広島県、愛媛県、福岡県、熊本県などで確認されている。

【世界の分布】

中国、モンゴル、朝鮮半島、台湾など。

【生息地の環境／生態的特性】

ねぐらとして樹洞や洞窟、岩盤の割れ目、人工の建物を利用し、ねぐらの周辺環境も市街地から森林と多様である。

【現在の生息状況／減少の要因】

2016年1月に中区栄三丁目のビル街でオス一頭が（野呂，2017）、続いて2019年4月に東山動植物園敷地内でもオス一頭が拾得された。音声調査では、ヒナコウモリの発する音声と類似した20kHz台の音声が、東谷山地域、小幡緑地、名古屋城などで確認されており、市内の広範囲で活動していることが示唆されている。

【保全上の留意点】

全国的に見ても市街地での確認事例が増えている（青木ほか，2006；重昆ほか，2013；大沢ほか，2014）。今後、名古屋市内でもねぐらや越冬場所が見つかる可能性もある。

【特記事項】

埼玉県や群馬県では新幹線の高架下をねぐらとしていた事例がある（重昆ほか，2013；大沢ほか，2014）。

【引用文献】

- 青木雄司・秋山幸也，2006. 相模原市の住宅地におけるヒナコウモリの保護記録. 神奈川自然誌資料, 27: 41-43.
 小鹿登美・子安和弘，2007. 愛知県安城市におけるヒナコウモリの記録. マンモ・ス特別号, (9): 17-22.
 重昆達也・大沢夕志・大沢啓子・峰下 耕・清水孝頼・向山 満，2013. 群馬県の新幹線高架橋で見つかったヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* の出産哺育コロニーおよび冬季集団. 群馬県立自然史博物館研究報告, 17: 131-146.
 川田伸一郎，2004. 愛知県で記録された特筆すべき小哺乳類 2 種. マンモ・ス特別号, (6): 3-5.
 野呂達哉，2017. 名古屋市におけるヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* (Peters, 1880) の初記録. なごやの生物多様性, 4: 109-112.
 大沢啓子・佐藤頭義・勝田節子・大沢夕志，2014. 埼玉県の新幹線高架におけるヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* の越冬期と出産哺育期の分布. 埼玉県立自然史博物館研究報告, 8: 49-52.
 佐藤頭義・勝田節子・山本輝正，2008. 愛知県におけるチチブコウモリとヒナコウモリの記録. マンモ・ス特別号, (10): 25-28.

【関連文献】

- Fukui, D. 2009. *Vespertilio sinensis* (Peters, 1880). In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), *The Wild Mammals of Japan*, pp.91-92. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
 前田喜四郎，2008. ヒナコウモリ. 日本の哺乳類 [改訂2版] (自然環境研究センター編), p.52. 東海大学出版会, 神奈川.

(野呂 達哉)



ヒナコウモリ

中区栄三丁目、2016年1月14日、野呂達哉 撮影

市内分布図

